

ホノルル美術館所蔵リチャード・レイン旧蔵江戸板 『伽婢子』に関して

花田, 富二夫

<https://doi.org/10.15017/4742005>

出版情報 : 雅俗. 12, pp.15-32, 2013-07-12. 雅俗の会

バージョン :

権利関係 : The pictures in this paper are hided because of copyright protection.



ホノルル美術館所蔵リチャード・レイン旧蔵江戸板『伽婢子』に関して 花田 富二夫

一 序ならびに従来の研究

本書については、すでに『仮名草子集成』第七卷（昭和六十一年九月、東京堂出版）「伽婢子」解題において、朝倉治彦氏の報告が備わっている。

それには、「延宝三年、毛利の目録に出ている「同新板」とあるは、寛文十一年鱗形屋刊の江戸板十三冊本をいうのであろう。リチャード・レイン氏蔵本によると、書誌は次の如くである。」とあり、以下、表紙、題簽、内題、刊記を記し、「目録題と本文章題とは不一致」と述べ、丁数や章段の数に言及しつつ、「挿絵は寛文六年のに倣ってはいいるが、縮小、構図近似、全く相違、該当図なしなど種々である（師宣風）。本文は漢字交り平がな、一面十四行、振がなをふり、濁点をうつてある。本文については、寛文六年板との比較は未調査である。」と述べられた。

従来の本書に関する言及はこれのみであり、以後、本書に関する紹介も報告もいまだ聞かない。筆者も当記述に従い、長年関心を払って注意してきたが、その所在も杳として知れなかった。しかし、今回、ホノルル美術館が収蔵した、故リチャード・レインコレクションを調

査するに際し、当本が原型のまま出現した。本文には破損があり、完全に書物全体の文章を知ることにはできないが、本体はきわめて保存良好で、原題簽つきの堂々たるものである。したがって、当本は現在国内外を通じた唯一の完本であり、また学会未紹介の稀本でもあるため、ここにその紹介を行うものである。

二 書誌的事項

本書の書誌的事項は以下の通りである。

書型 大本 十三卷十三冊 袋綴

表紙 原表紙 縹色地巾繫ぎ牡丹花艶出し紋様

縦二十七・三センチ 横十九・〇センチ

本文 序文十一行 本文十四行 一行約二十六字

漢字・ひらがな混じり、「。」有り

匡郭 四周单边 縦二十二・三センチ 横十六・六センチ

題簽 原題簽 刷 隅入り・角書・左肩・子持ち枠

第一冊「新板 遠とぎばうこ 一」

第二冊「新板 御伽婢子 二」

第三冊「新板 遠とぎばうこ 三」

第四冊「新板 御伽婢子 四」

第五冊「新板 遠とぎばうこ 五」

第六冊「新板 御伽婢子 六」

第七冊「新板 遠とぎばうこ 七」

第八冊「新板 御伽婢子 八」

第九冊「新板 遠とぎばうこ 九」

第十冊「新板 御伽婢子 十」

第十一冊「新板 遠とぎばうこ 十一」

第十二冊「新板 御伽婢子 十二」

第十三冊「新板 遠とぎばうこ 十三」

序題 「伽婢子序」

目録題 「伽婢子^{とぎばうこ}卷^{くわん}第一（一六）」（「第」の振り仮名、卷二、四、六は「た」）

「た」

「続伽婢子卷第一（一七）」

本文題 「伽婢子卷之二」（卷二のみ、他巻なし）

尾題 「伽婢子卷一（一三、四、五、六）之終」（巻二は破れのため未詳）

「続伽婢子卷一（一七）終」

柱刻 「伽婢子卷一（二、四一十三）」

卷三「伽婢子卷三」（二丁）、「おとぎ第三」（二、三丁）、「伽婢

子第三」（四一十三、十五、十六丁）、「伽婢子三」（十四丁）、「伽

婢子卷三」（十七一二十三丁）

丁付 第一冊「一（序）、二（序・目）、三十七、**十八**（オ）」

第二冊「一十七、**十八**（オ）ヤブレ」

第三冊「一二十三（オ）」

第四冊「一廿一（オ）」

第五冊「一十八（オ）」

第六冊「一**十九**（オ）ヤブレ」

第七冊「一二十」

第八冊「一二十一終」

第九冊「一二十」

第十冊「一十八」

第十一冊「一十八終」

第十二冊「一十七終」

第十三冊「一十八、**十九**ヤブレ」

丁数

第一冊 十七丁半（序一丁半、目録半丁、本文十五丁半）

第二冊 十七丁半（目録半丁、本文十七丁）

第三冊 二十二丁半（目録半丁、本文二十二丁）

第四冊 二十丁半（目録半丁、本文二十丁）

第五冊 十七丁半（目録半丁、本文十七丁）

第六冊 十八丁半（目録半丁、本文十八丁）

第七冊 二十丁（目録半丁、本文十九丁半）

第八冊 二十二丁（目録半丁、本文二十丁半）

第九冊 二十丁（目録半丁、本文十九丁半）

第十冊 十八丁（目録半丁、本文十七丁半）

第十一冊 十八丁（目録半丁、本文十七丁半）

第十二冊 十七丁（目録半丁、本文十六丁半）

第十三冊 十九丁（目録半丁、本文十八丁半）

挿絵
師宣風

*総丁数二四七丁 一冊平均十九丁

第一冊 半丁七面（四才、五才、八才、十才、十一才、十四才、十六才）

十六才）

第二冊 半丁七面（二才、四才、六才、九才、十一才、十四才、十六才）

十六才）

第三冊 半丁十面（二才、三才、五才、七才、九才、十一才、十三才、十六才、十九才、二十一才）

十三才、十六才、十九才、二十一才）

第四冊 半丁八面（二才、五才、六才、八才、十一才、十四才、十六才、十九才）

十六才、十九才）

第五冊 半丁七面（二才、四才、六才、九才、十二才、十四才、十六才）

十六才）

第六冊 半丁八面（二才、三才、五才、七才、九才、十一才、十四才、十七才）

十四才、十七才）

第七冊 半丁八面（三才、五才、八才、十一才、十三才、十六才、十九才、二十才）

才、十九才、二十才）

第八冊 半丁六面（三才、六才、九才、十二才、十五才、十八才）

第九冊 半丁七面（三才、五才、八才、十一才、十四才、十七才、二十才）

才、二十才）

第十冊 半丁六面（三才、六才、九才、十二才、十五才、十八才）

第十一冊 半丁六面（三才、六才、九才、十二才、十五才、十八才）

八才）

第十二冊 半丁六面（三才、六才、八才、十一才、十四才、十七才）

七才）

第十三冊 半丁七面（三才、六才、九才、十二才、十五才、十七才、十九才）

七才、十九才）

*総計半丁九十三面 一冊平均七・二面

刊記

大伝馬三町目

寛文十一辛亥歳大蔭吉旦 鱗形屋板

備考

「美濃兼山／呉服太物類／永楽屋」「永楽屋」（黒、長方形）印。

本文破損箇所

伽婢子 卷二 十八才最終二行

卷四 二ウ冒頭二行、十八才最終一行、十八ウ冒頭二行

卷六 一ウ冒頭六行下部、二ウ同五行同、三ウ同三行

同、四才最終一行、四ウ冒頭四行下部、五ウ同五行同、

六才終四行同、以下十八ウまで、各丁のオモテは終わり数行、ウラは冒頭数行の下部に破損

続伽婢子

卷三 一ウ冒頭二行下部、三才挿絵柱側、三ウ冒頭二

行、五才挿絵柱側、五ウ冒頭三行、八才挿絵柱側

卷四 十五才挿絵柱側、十五ウ冒頭四行

以上より、本書は全十三巻のうち、前半の六巻と後半の七巻に分かれ、前半の内題を「伽婢子」、後半を「続伽婢子」とする。本書は、いわばこの二部構成で成立しており、板式は前半も後半も同一である。また、刊記も最終巻に「一カ所のみであるので、別々に販売されたものではなからう。しかし、貞享二年板広益書籍目録には「おときばうこ」十三冊の外に、「続おときばうこ」十冊とあり、元禄十二年刊新版増補書籍目録にも同様の書名・冊数が見えている。したがって、元禄前後、

後半のみが十冊本で刊行された可能性もある。ただ、それにしても十冊というのはやや疑問であり、実際に書物が刊行されたかどうかは、今のところ確認できていない。なお、『日本小説書目年表』にも「続伽婢子」十冊とあるが、『国書惣目録』では所在が記載されていない。また、元禄十二年には半紙本の十三巻六冊本（中川茂兵衛板）も刊行されているが、前述「続おときばうこ」とは相違する。

三 説話構成

次に全体の内容と編成について記す。まず、上方板『伽婢子』には惣目録と了意の第一序文、雲樵の第二序文があるが、江戸板では、惣目録及び、第二序文は削除されている。その代わり、巻毎に目録が新しく付されている。

では、その内容を目録によって示そう。上段が江戸板、下段が初刊の上方板の目録である。なお、目録題と章題には相違があるので、（ ）に章題を記した。また、『続伽婢子』の方は章題に「第〳」と章番号が付されている。なお、振り仮名は省略した。

目録一覧

江戸板 巻一（一冊）

序

- 1 真上阿祇奈君龍宮上棟の文をかく事
（龍宮の棟上の事）
- 2 あやの兵次黄金をかして損却する事
付り過去物がたりの事

上方板 巻一（一冊）

序

- 1 真上阿祇奈君龍宮上棟の文を書事
（龍宮の棟上）
- 2 文兵次黄金をかして損却する事
付過去物語

（黄金百両かして損却する事）

巻二（二冊）

- 1 さかひの長次十津川の仙境に入事
（十津川の仙境の事）
- 2 しんくのうち帯付り檜垣平次二世のちぎりをなす事
（二世の契真紅のうち帯の事）

- 3 割竹小弥太妖女を売事
（狐の妖怪の事）

巻三（三冊）

- 1 浜田与兵衛つまの夢を正しくみる事
（妻の夢を夫面に見る事）
- 2 蜂谷孫太郎鬼に成し事
（鬼谷におちて鬼となる事）
- 3 ぼたんのとうろうの事
（牡丹灯籠幽霊の事）

- 4 藤原基頼卿海賊に逢付梅花の屏風
によつてつまの対面の事
（梅花屏風の事）

巻四（四冊）

- 1 浅原新之丞ゑんま王と対決の事
（地獄をみてよみかへる事）
- 2 舟田左近夢のちぎりの事
（夢のちぎりの事）
- 3 遊佐七郎一睡に三十年の栄花の事
（一睡に三十年の夢見る事）
- 4 入棺のしかばねよみかへる事

（黄金百両）

巻二（二冊）

- 1 堺の長次十津川の仙境に入事
（十津川の仙境）
- 2 真紅のうち帯付檜垣平次二世を契事
（真紅繫帯）

- 3 割竹小弥太壳「妖女」事
（狐の妖怪）

巻三（三冊）

- 1 浜田与兵衛妻の夢を正く見る事
（妻の夢を夫面に見る）
- 2 蜂谷孫太郎鬼に成事
（鬼谷に落ちて鬼となる）
- 3 牡丹灯籠
（牡丹灯籠）

- 4 藤原基頼卿海賊に逢事
（梅花屏風）

巻四（四冊）

- 1 浅原新丞閻魔王と対決の事
（地獄を見て蘇）
- 2 船田左近夢のちぎりの事
（夢のちぎり）
- 3 遊佐七郎一睡に三十年の栄花の事
（一睡三十年の夢）
- 4 入棺の戸甦怪

(入棺尸甦あやしみの事)

5 野路忠太がつまのゆうれい物語の事

(幽霊逢夫かたる事)

巻五(五冊)

1 長柄僧都銭の精霊と物かたりの事

(和銅の銭の精あらはるゝ事)

2 鶴瀬安左衛門の勇士の亡魂にあふ

て諸将を評するを聞事

(幽霊評諸将事)

3 富田久内じひふかきにより火神の

つかひにあふて火難をのがるゝ事

(焼亡^二定限ある事)

4 原隼人佐鬼胎の事

(原隼人佐鬼胎の事)

巻六(六冊)

1 観世音阿弥能の事

(天狗堂中にすむ事)

2 伝尸病の事

(幽鬼嬰兒に乳をあたふる事)

3 伝尸病をはらひさる事

(伝尸禳去の事)

4 瘤の中よりへび出る事

(瘤の中より蛇出る事)

5 随転が力量の事

(随転力量ある事)

6 山中鬼魅の事

(入棺之尸甦怪)

5 野路忠太が妻の幽霊物語の事

(幽霊逢^レ夫話)

巻五(五冊)

1 長柄僧都が銭の精霊に逢事

(和銅銭)

2 鶴瀬安左衛門勇士の亡魂に逢て諸

将を評する事

(幽霊評^二諸将^一)

3 富田久内慈悲深きにより火難を遁

る事

(焼亡有^二定限^一)

4 原隼人佐鬼胎の事

(原隼人佐鬼胎)

巻六(六冊)

1 伊勢兵庫到^二仙境^一事

(伊勢兵庫仙境に到る)

2 岩田の刀自里見義弘に逢て長生物

語の事

(長生の道士)

3 藤井清六遊女宮城野を娶事

(遊女宮木野)

4 蜘蛛のかゝみの事

(蜘蛛の鏡)

5 長間佐太白骨の妖物に逢事

(白骨の妖怪)

6 死^レ難先兆【総目録になし】

(山中の鬼魅の事)

7 義輝公の馬ものいふ事

(馬人語をなす事)

8 百物がたりの事

(怪を語は怪いたる事)

続巻一(七冊)

第一 伊勢兵庫仙境にいたる事

(伊勢兵庫仙境にいたる事)

第二 岩田刀自長生物がたりの事

(長生の道士)

第三 藤井清六遊女みやぎ野をめとる事

(遊女宮木野)

第四 蜘蛛のかゝみの事

(蜘蛛のかゝみ)

第五 長間佐太白骨のばけものにあふ事

(白骨妖怪)

第六 磯谷甚七難死のつげの事

(死^レ難先兆)

続巻二(八冊)

第一 伏見御香宮絵馬のねたみの事

(絵馬のねたみ)

第二 蘆沼次郎右衛門善悪物かたりの事

(廉直頭人死司^二官職^一)

第三 飛加藤が術の事

(飛加藤)

巻七(七冊)

1 伏見御香宮絵馬の事

(絵馬之妬)

2 蘆沼次郎右衛門善悪物語の事

(廉直頭人死司^二官職^一)

3 飛加藤が術の事

(飛加藤)

4 小山田記内契^二幽霊^一事

(中有魂形化契)

5 桜田源五津田彦八と妻を争事

(死亦契)

6 菅谷九右衛門柘植瀧川が幽霊に逢事

(菅谷九右衛門)

7 堅田又五郎雪白明神の加護を蒙る事

(雪白明神)

巻八(八冊)

1 長鬚国の事

(長鬚国)

2 性海鹿嶋明神に詣て大蛇を殺す事

(邪神を責殺)

3 長谷兵部恋物語の事

(哥を媒として契る)

第四小山田記内幽霊にちぎる事

(中有のたましゐ化してちぎる)

第五桜田源五津田彦八妻をあらそふ事

(死してまたちぎる)

第六菅谷九右衛門栢植瀧川か幽霊に

あふ事

(菅谷九右衛門)

第七堅田又五郎雪白明神の加護を蒙事

(雪白明神)

続巻三(九冊)

第一長鬚国の事

(長鬚国)

第二性海鹿嶋明神にまうで、大蛇を

殺事

(邪神をせめころす)

第三長谷兵部恋物語の事

(哥をなかたちとしてちぎる)

第四隅屋藤次が事

(幽霊出て僧にまみゆ)

第五屏風の絵人形をとる事

(屏風の絵の人形おどりうたふ)

続巻四(十冊)

第一安達喜兵次狐にたぶらかさるゝ事

(狐いつはりて人にちぎる)

第二下界の仙境の事

(下界の仙境)

第三中原主水正幽霊にちぎる事

4 隅屋藤次が事

(幽霊出て僧にまみゆ)

5 屏風の絵人形躍事

(屏風の絵の人形躍歌)

巻九(九冊)

1 安達喜兵次狐に誑かさるゝ事

(狐偽て人に契る)

2 下界の仙境の事

(下界の仙境)

3 中原主水正幽霊に契る事

(金閣寺の幽霊に契る)

4 人面瘡の事

(人面瘡)

5 丹波国野々口鬼女の事

(人鬼)

巻十(十冊)

1 守宮の妖物の事

(守宮の妖)

2 岡谷式部が妻水神となる事

(妬婦水神となる)

3 上杉憲政息女弥子の事

(金閣寺のゆうれいにちぎる)

第四鍛冶友勝魂遊行の事

(魂もぬけてさまよふ)

第五七歩蛇の事

(七歩蛇の妖)

続巻五(十一冊)

第一守宮のばけものゝ事

(守宮のばけもの)

第二岡谷式部が妻水神となる事

(妬婦水神となる)

第三上杉憲政の息女弥子の事

(いのりて幽霊にちぎる)

第四しのびの術の事

(しのびの術)

第五鎌鼬付提馬風の事

(鎌鼬付提馬風)

第六了仙貧窮付天狗道の事

(了仙貧窮付天狗道)

続巻六(十二冊)

第一栗栖野のかくれさととの事

(かくれさと)

第二土佐国狗神付金蚕の事

(土佐国狗神付金蚕)

第三豊田孫吉が事

(生をかへてちぎる)

(祈て幽霊に契る)

4 窃の術の事

(窃の術)

5 鎌鼬付提馬風の事

(鎌鼬付提馬風)

6 了仙貧窮付天狗道の事

(了仙貧窮付天狗道)

巻十一(十一冊)

1 栗栖野隠里の事

(隠里)

2 土佐の国狗神付金蚕の事

(土佐の国狗神付金蚕)

3 豊田孫吉が事

(易レ生契)

4 七歩蛇の事

(七歩蛇の妖)

5 鍛冶友勝魂遊行の事

(魂蛻吟)

6 大嶋源五郎か魚膽の怪物之事

(魚膽の怪)

巻十二(十二冊)

1 梅の妖精の事

(早梅花妖精)

2 岩崎数馬が事

(幽霊書を父母につかはす)

3 厚狭か死霊の事

(厚狭応報)

第四邪姪のつみ立身せざる事

(邪姪のつみ立身せず)

第五大嶋源五郎か魚膽のばけもの、事

(魚膽の怪)

4 白石右衛門尉紆媒之事

(邪姪の罪立身せず)

5 盲女を救て幸をうくる事

(盲女を憐て報を得)

6 石軍の事

(大石相戦)

続巻七(十三冊)

第一梅の妖精の事

(早梅花の妖精)

第二芦崎数馬正木龍子が事

(幽霊父母に文をつかはす)

第三厚狭か死霊の事

(厚狭応報)

第四盲女をすくふてさいはひをうくる事

(盲女をあはれみてむくひを得たり)

第五大石あひた、かふ怪異の事

(大石あひた、かふ)

巻十三(十三冊)

1 観世音阿弥能の事

(天狗塔中に棲)

2 伝戸病の事

(幽鬼嬰兒に乳す)

3 小蛇瘤の中より出る事

(蛇瘤の中より出)

4 伝戸病を攘去事

(伝戸禳去)

5 随転が力量の事

(随転力量)

6 蝨瘤の事

(蝨瘤)

7 山中鬼魅の事

(山中の鬼魅)

8 義輝公之馬言事

(馬人語をなす怪異)

9 百物語の事

(怪を話ば怪至)

右の通り、江戸板の説話総計は六十五話であり、上方板は六十八話である。江戸板において都合三話が削除されたことになる。●が削除された章である。

では、右の説話構成を上方板との比較において再度表示し、その編集の様相を示しておこう。上が江戸板の巻と章番号、下がそれに相応する上方板の巻・章番号である。

江戸板

上方板

巻一 (一) 巻一 1 1

巻二 (二) 巻一 1 2

巻二 (一) 巻二 1 1

巻二 (二) 巻二 1 2

巻三 (一) 巻三 1 1

巻三 (二) 巻三 1 2

巻三 (三) 巻三 1 3

巻三 (四) 巻三 1 4

巻四 (一) 巻四 1 1

巻四 (二) 巻四 1 2

巻四 (三) 巻四 1 3

巻四 (四) 巻四 1 4

巻五 (一) 巻五 1 1

巻五 (二) 巻五 1 2

巻五 (三) 巻五 1 3

巻五 (四) 巻五 1 4

巻五 (五) 巻五 1 5

巻六 (一) 巻十三 1 1

巻六 (二) 巻十三 1 2

巻六 (三) 巻十三 1 3

巻六 (四) 巻十三 1 4

巻六 (五) 巻十三 1 5

巻六 (六) 巻十三 1 7

巻六 (七) 巻十三 1 8

巻六 (八) 巻十三 1 9

続巻一 (一) 巻六 1 1

続巻一 (二) 巻六 1 2

続巻一 (三) 巻六 1 3

続巻一 (四) 巻六 1 4

続巻一 (五) 巻六 1 5

続巻一 (六) 巻六 1 6

続巻二 (一) 巻七 1 1

続巻二 (二) 巻七 1 2

続巻二 (三) 巻七 1 3

巻五 (三) 巻五 1 3

続巻二 (三) 巻七 1 3

(四)	卷七―4	(二)	卷十一―2
(五)	卷七―5	(三)	卷十一―3
(六)	卷七―6	(四)	卷十一―4
(七)	卷七―7	(五)	卷十一―5
続巻三		(六)	卷十一―6
(一)	卷八―1	続巻六	
(二)	卷八―2	(一)	卷十一―1
(三)	卷八―3	(二)	卷十一―2
(四)	卷八―4	(三)	卷十一―3
(五)	卷八―5	(四)	卷十二―4
続巻四		(五)	卷十一―6
(一)	卷九―1	続巻七	
(二)	卷九―2	(一)	卷十二―1
(三)	卷九―3	(二)	卷十二―2
(四)	卷十一―5	(三)	卷十二―3
(五)	卷十一―4	(四)	卷十二―5
続巻五		(五)	卷十二―6
(一)	卷十一―1		

以上より、江戸板は、巻一から巻五までは、上方板を忠実に踏襲し、説話順などの変更がないが、巻六には、上方板の巻十三を配置した。その内、巻十三の第6話「蝨瘤の事」は削除し、第3話と4話を入れ替えている。おそらく伝戸病関連をまとめたのであろう。第七冊目からは、「続伽婢子」となり、巻六から順番に構成した。続巻四は、上方板巻九とともに巻十一から二話収載し、続巻六には、巻十二から一話編入させた。そして、最終巻は巻十二の五話をあてた。最終的に上方板から全体として削除されたのは、目録の一覧表に●を付けたよう

に、巻九の4「人面瘡の事」、5「丹波野々口鬼女の事」、巻十三の6「蝨瘤の事」の三話である。

そして、このような編成を行う中で、最も大きな変更点は、巻六を上方板の巻六としないで、巻十三を当てた点である。「伽婢子」と「続伽婢子」の二部構成とするに對し、上方板通りには編集せず、上方板の最終巻を移動させて前半部を構成し直した。その理由としては、全体的に丁数が一冊平均十九丁となっている点から、この丁数を合わせようとした意図があったものかと推測される。また、内容的にも前半と後半で均衡を保とうとした面もあったのではなからうか。つまり、巻十三は、比較的章自体が短く、奇談に属するものが多いので、前半にこの箇所を移動させることによって、比較的長い説話の多い前半に変化をもたせようとしたのかもしれない。ただ、そうすると、最終章の「百物語の事」は全巻の最終章に相応しい内容であるため、巻六に移動させたことによって、初刊本の有した内容的整合性が失われたとも言える。

一方、削除された「人面瘡の事」などは、はやくから『野槌』などにも記載され、奇談としてもある程度世上に流布しており、人々の興味をひいていたものとも推測されるが、なぜこのような話を削除したかについては、今ひとつ判然としない。いずれにせよ、以上のように、江戸板は上方板を相当程度編集し直し、新しい説話構成で編成されたことが判明する。

四 諸本に関して

書誌の項で、『続伽婢子』の刊行の可能性について述べたが、本書の出現によって、これまでは特定できなかった次の書物が、江戸板『伽婢子』の一部であることが判明した。以下に、それらを報告しておく。

(1) 桑名市立図書館秋山文庫蔵本 (78/6)

六卷六冊 ただし、第六冊目は上方板なので、該当書は五卷五冊。

大本 縦二十六・〇センチ、横十八・四センチ

表紙 藍色無紋様

題簽 なし 卷数墨書

匡郭 四周单边 縦二十二・三、横十六・五センチ

柱 「伽婢子卷一 (二、四、五)」

卷三の二、三丁「おとぎ第三」、四〇十三、十五、十六丁は

「伽婢子第三」、十四丁「伽婢子三」、十七〇二十三丁「伽婢子

卷三」

丁数 卷一 十七丁半 一〇十八オ

卷二 十七丁半 一〇十八オ

卷三 二十三丁 一〇二十三オ

卷四 二十丁半 一〇二十一オ

卷五 十八丁 一〇十八オ

挿絵 第一冊 半丁七面 (四オ、五オ、八オ、十オ、十一オ、

十四オ、十六オ)

第二冊 半丁七面 (二オ、四オ、六オ、九オ、十一オ、

十四オ、十六オ)

第三冊 半丁十面 (二オ、三オ、五オ、七オ、九オ、

十一オ、十三オ、十六オ、十九オ、二十一オ)

第四冊 半丁八面 (二オ、五オ、六オ、八オ、十一オ、十

四オ、十六オ、十九オ)

第五冊 半丁七面 (二オ、四オ、六オ、九オ、十二オ、十

四オ、十六オ)

(2) 服部仁氏蔵『伽婢子』

卷四 一冊

表紙の表面残欠縹色。挿絵の一面に破損があるものの、本文は完備。レイン旧蔵本の破損箇所を補うことができる。印刻時期はレイン旧蔵本より後年か。挿絵の一部に破損箇所がある。

(3) 印刷博物館蔵『続伽婢子』

卷二 一冊

大本 縦二十七・二センチ、横十八・六センチ

表紙 表表紙は脱、裏表紙損紺青、模様なし

柱 「伽婢子卷八」

丁付 「一〇二十一終」

匡郭 四周单边 たて二十一・九センチ、よこ十六・六センチ

挿絵 三オ、六オ、九オ、十二オ、十五オ、十八オ

本書は開館特別企画展に出品され、「展示目録」に八丁ウラと九丁オモテの見開き写真が掲載されている。写真掲載の寸法と若干相違するが、調査計測数字を記載しておく。匡郭の縦寸がレイン旧蔵本より、〇・三ミリも縮んでいるところから察して、本書はレ

イン旧蔵本より時期が下った印刻であつたろうか。目録などは省略するが、内容的にはレイン旧蔵本と同一である。

(4) 天理図書館蔵『続伽婢子』

巻五 一冊

大本 縦二十六・八センチ、横十八・四センチ

表紙 藍色

題簽 左肩双辺 「をときぼう」

丁数 十八丁

(5) 江本裕氏蔵『続伽婢子』

巻七 一冊

大本 縦二十六・七センチ、横十八・四センチ

表紙 改装表紙

題簽 なし

匡郭 四周單辺 縦二十二・三センチ、横十六・三センチ

丁数 十九丁

刊記

大伝馬三町目

寛文十一辛亥歳大蔭吉旦 鱗形屋板

(注) (4) (5) に関しては、東洋文庫『伽婢子』2 (平凡社)

江本裕氏解題による。

以上が現在までに判明した江戸板である。今後はさらに同類の書物が見いだされる可能性がある。

五 本文に関して

現在は全体の校異作業がおよそ半分ほど終了しており、まだ、完全な異同調査が完了していないので、ここでは、序文と巻一の1を例に初板との相違を述べ、おおよその傾向を記すことにする。ただし、振り仮名については、これも重要と思われたが、今回の考察には含めなかった。

巻一 異同の概要

1 初板の漢字をひらがなに直した箇所 二七五

2 初板のひらがなを漢字に直した箇所 一〇〇

右の多い順 「有」二〇、「是」一四、「共」一〇、「其」九、

「也」七、「取」此各三、

「云」所「心」玉「又」皆「木」物各二、

「何」間「参」置「頭」持「中」道「久方」

「付」望「敷」事「命」成「時」見「兵」

「大」立「水」各一

3 初板にない文字を加えた箇所 六

4 初板の文字を削った箇所 一二

5 その他

仮名遣い 「お」を「を」へ 二

「を」を「お」へ 二

「む」を「ん」へ 二

「え」を「ゑ」へ 一

漢字変換 「滋賀」を「志賀」へ、「瓶」を「水かめ」へ

その他 「に」を「を」へ、「かんが見る」を「かんがみる」へ、

「上棟」を「むね上」へ、「者」を「物」へ、

「土」を「兵」へ、「しめらる」を「しむ」へ

1のように、江戸板では、本文の漢字をひらがな表記に直した箇所が三〇〇箇所弱見られる。このことは江戸板では、初板の難しい読みを、読者に分かり易く表記したことが知られる。2では、とくに、「有」「是」「共」「其」などに関して、上方板がひらがな表記した箇所が多いのに対し、江戸板では多く漢字に改変した傾向が見てとれる。3、4の項目は主に助詞に関する加除であり、削除箇所では「かたはらに」という副詞であったり、「ちりみだれん」を「みだれん」につづめたりという細部に関する変換であった。

総体的に見て、江戸板では初板の本文を大きく変更することはせず、あくまでも初板に忠実に従っていると言えよう。比較的大きな変更箇所は巻末部分に近い箇所で、「さてこれらを司る官人はいづくにありやと、こたへていふやう」の文言を「さていつくに有やと、官人こたへて云やう、これらのつかさは」と入れ替えた部分のみであった。これらの調査より、江戸板における初板との本文異同に関しては、序文と巻一の1に関する限り、読者への分かり易い表記の配慮のみが際立っていると言える。

また、清濁に関してはおおまかなところ、初板の濁音を清音に表記した箇所が八〇箇所にのぼるのに対し、清音を濁音に替えているのは四箇所のみであった。とするなら、江戸板では清音表記を原則としたことが考えられるだろうか。以上は現段階のあくまでも巻一の1を中心とするものである。

ただ、巻によっては、改変の多い箇所も存する。前半部で比較的改变が多いのは、前半の最終巻である巻六である。これは前述のように、上方板の巻十三を移動させた巻である。次に若干例示してみよう。【一】は、上方板から削除された箇所。「一」は、江戸板で加筆された箇所である。

巻六「天狗堂中にすむ事」

①「百余間の棧敷一同に焼あがり、【貴賤男女うへをしたへもて返し、さはぎみだれうろたへまどふて、あやまちをいたし疵をかうふり、死するものはなはだおほし。舞台も楽屋も焼ければ】法師我を」（上方板）。

「百余間の棧敷【ぶたいがく屋まで】一同に焼あがり、ほうし我を」（江戸板）。

②「その人ども更に目にもかけず、とがめもせず、【あるひは両方より来る人の首髪もとゞりをつかみて、二人を一所に引よするに、此二人俄に刀をぬきて、打あひきりあひ、手を、ふて朱になるもあり。日ことにかゝる事共いくらといふ数をしらず】其外【江州】勢多のはしに行て」（上方板）

「其人共さらに目にもかけず、とがめもせず、せたのはしに行て」（江戸板）

③「すこしの芸能あれば、これに過じと自慢する奴原は、つらのにくさにかうべをはりて通る」（上方板）

「すこしのげいのうあれば、これにすぎじとじまんするやつばらは、つらにくさゆへ也」（江戸板）

①②は文意の筋が通るよう留意しつつ、文章の分量を減少させたも

のであろう。③は語句を改変し、やはり分量を減少させたものである。同巻「瘤の中よりへび出る事」

「その色あるひは黒く、あるひは白く、又は青く又は黄也」(上方板)

「其いろ色々也」(江戸板)

多くの形容の言葉を「色々」の一語に代弁させた箇所である。

同巻「山中鬼魅の事」

当章では上方板の文章を削除した箇所が多い。

「跡より女の声にてなきく来る。【あゆむともなくころぶともなく、やうく】峠まで」(上方板)

「あとより女のこえにてなきく来る。とうげまで」(江戸板)

「弓削にて打すてめしつれずして来りしを」(上方板)

「ゆげにてすてをきしか」(江戸板)

「はや首をばみな【くらひつくし、肩をかぎり右の手を】くらひければ」(上方板)

「はやくびをばみなくらひければ」(江戸板)

「鬼はや【其あひだに赤子はみなくらひつくして】蝶とんばうのこ」とく」(上方板)

「鬼はや蝶とんばうのこ」とく」(江戸板)

「たうときをこなひして年月を送りし。【後にその行方なし】」(上方板)

「たうときおこなひして年月をおくりし【となり】」(江戸板)

巻三「藤原基頼卿海賊に逢付梅花の屏風によつてつまの対面の事」では「馬にのりて手綱の曲をきはめ、水練にその術をつたえ、半日ばかりは水底にありても物ともおはず、又よく水をよぎくゝる事

魚のごとし」(上方板)

「馬にのりて手つなのきよくをきはめ、水練の術水に入てはうのことし」(江戸板)

「財宝をうばひとり徳つかばや。【今の世は所くみだれ立て、さしてとがむる人もあるまじ】とおもひ」(上方板)

「ざいほうをうはいひとり徳つかはやと思ひ」(江戸板)

巻五「原隼人佐鬼胎の事」では、

「諸侍みなうたがひをのこさずとなり、【他国といへども陣所戦場よく見たて、閑道、水の手をかんがふるに更にあやまちなき事】、神に通ぜしかと」(上方板)

「諸侍みなうたがひをのこさずと也。【万事】神に通ぜしかと」(江戸板)

「家にある【事まれ也、その家は上条の地藏堂のほとりにあり】ある時妻」(上方板)

「家に有。ある時つま」(江戸板)

右は、総じて文章を減少させる意図による改変かと推測される。が、そのようでない改変箇所もある。

たとえば、巻三「蜂谷孫太郎鬼に成し事」も改変箇所が比較的多い章であるが、次のような箇所が見える。

「目のひかりはいなびかりのごとく口より火焰をはく。孫太郎が来るを見て、たがひにいはく、これこの国のさはりとなるものぞ。とりがすな」(上方板)

「目のひかりはいなつまのごとく口よりくはゑんをふく。孫太郎か来るをみて、たがひにいはく、此者死して此国に来る者なるか。

生ながら来るこそさいはいなれ、取りにがすな」(江戸板)

「さま／＼なぶりもてあそばれ、大なる辱を見たり」(上方板)

「さま／＼なぶりもてあそふ事、なんち大なるはちにあらすや」

(江戸板)

以上、上方板と江戸板との異同は文章の削減をはじめ、様々な状態で改変が行われている。本稿では紙幅の関係上、以上に留め、今後の整理に譲りたい。

六 挿絵に関して

挿絵は前記の通り、師宣風の画風と言ってよからう。鱗形屋が師宣絵本を本格的に出版するのは、延宝年間に入ってからでもあるので、本書を師宣挿絵と断定するのはひとまず留保しておく。もちろん、挿絵自体の鑑定こそが決め手ともなるわけであり、それに対する知見こそが求められるのであるが、ここではその断定を避け、今後の検討に委ねたい。後掲の挿絵をご参照願いたい。

卷一に関しては、上方板では、見開きの挿絵が三図掲載されている。それらは、

第1図 龍宮の使者が阿祇奈君を迎えにやってきて、雲上の虚空を飛ぶがごとく連れて行く場面

第2図 宮殿内に龍王が迎え、三人の客(江の神、河の神、淵の神)も同座して、女房たち十余人が舞い踊る場面

第3図 おおはまぐりの官人が龍宮内を案内し、電母の鏡、雷公の鼓、哨風のかわぶくろ、洪雨の瓶などを見学する場面

である。これらを江戸板では半丁ずつ、四図に描き分けている。

江戸板第一図、第二図が(上方板第1図)に相当し、第三図が(第2図)、第四図が(第3図)に当たる。いわば見開きを半丁につづめた形となっている。また、江戸板には枠付きで挿絵の人物や場面の説明などが入る。上下の雲は上方板が横線のみであるのに対し、江戸板は雲形がはっきりとカタどられている。

本文との対応関係を見ると、第1図では、阿祇奈君を迎えにくるのは、本文では「布衣にゑほし着たるもの二人」となっており、上方板の方はそれに即応しているが、江戸板の方は使者が狩衣姿であり、本文とは相違している。また、使者につきそう「白丁(十余人)」も上方板では和風であるが、江戸板の方は掲げる旗も含み、唐風となっている。第2図では、龍王と同時に三人の客が現れ、それらは、江の神、河の神、淵の神であるが、上方板ではその三人の神は男神であり、それぞれ獣皮を敷いた玉机に座している。正面の床上には「女房」たちが舞い踊っている。ところが、江戸板では左に座しているのが三人の神たちと推測されるのであるが、右側の舞い踊る女房たちの方に枠付きの神名が記されているのである。それらは、「かわのかみ」「ふちのかみあらわる」、「ゑのかみあらわる」、「などであり、説明文の位置からして、単なる間違いとも思われず、男神を女神に替えた可能性も高い。第3図では、案内の官人はおおはまぐりの精であり、上方板では、頭上に掲げる器官の様相より、本文に忠実なことが知れるが、江戸板の方は「あんないの人」として女人の姿である。頭上に掲げるのも冠かとも推測され、上方板のように本文に忠実ではなく、むしろ積極的に女官に改変したものであったろう。「かみなりのたいこ」も庶民的な

図となっている。

以上より、総じて上方板は本文に忠実であるが、江戸板の方は多少の改変を行っていることが判明する。画風自体は師宣風とも言えるが、前述の通り師宣の関与があったかどうかは今後の課題としたい。なお、江戸板巻一の1には、第五図も掲載されるが、これは巻一の第2章に関する挿絵であり、前章に持ち込まれたものである。本書ではこのように前章に挿絵が持ち込まれる箇所も多い。編集の都合であったのだろうか。したがって、本稿では第五図は掲載しないでおく。

七 書肆に関して

書肆は鱗形屋であり、江戸を代表する老舗の一品である。その出版活動は広範にわたり、しかも一代ではなく、数代にも続いている関係上、出版の全容に関しては、いまだ解明されていない。初代が加兵衛、二代目が三左衛門、三代目が孫兵衛と言われる^{〔1〕}。柏崎順子氏^{〔同注1〕}によると、加兵衛による出版物としては、『讃嘲記時之太鼓』（寛文七年頃推定）、『吉原よぶこ鳥』（寛文八年—柳亭種彦編『吉原書籍目録』より）が早いようである。ただ、岡雅彦氏他編『江戸時代初期出版年表』（勉誠出版、二〇一二年）につくと、『花鳥山桜若衆』（赤木文庫蔵）の刊記が、「明暦第三丁酉」とあり、この歳は明暦三年であり、「大伝馬三丁目／うろこかたや板」と住所付けも見えている。原物は実見されていないようであるので、刊記の状態は未詳であるが、これが正しく認められるならば、加兵衛の最も早い出版物であり、既に明暦三年には大伝馬町に店舗を構えていたことが窺える。井上隆明氏『改訂

増補近世書林板元総覧』には、『花鳥山桜若衆』とともに『西明寺百首』も記載されるが、当書は未見である。なお、井上氏同書には加兵衛が経師屋と記述してある。とするなら、もともと暦の出版に関係する一族であったものかとも推定され、もしそうなら、鱗形屋は印刷技法に熟していたのであり、そのことが江戸での出版活動を可能としたものであったろう。ただし、明暦三年は一月に江戸で振袖大火が起こっており、大伝馬町界隈も炎上焼失したであろうから、鱗形屋も罹災したかと推定される。『花鳥山桜若衆』が火災後の刊行であったか否かは不詳である。

鱗形屋は、草創期の万治期より、江戸吉原の遊女評判記を刊行し、そして、いわゆる江戸板の造本を手がけ、古浄瑠璃、菱川師宣絵本などを刊行した。江戸板の著名な書肆としては、他に同時期の松会があり、本問屋、山本九左衛門、升屋、正本屋などが活躍した。前述柏崎氏の見解を参考にすると、江戸板とは、主に、万治・寛文期において、江戸で出版された独特の造本様式を持つもので、具体的には、料紙に漉き返しの精製が粗であり、独特の字風を持ち、師宣風の挿絵を有し、装飾的な題簽（とくに角書き部分）が見え、行数が京板より増加（十五・六行）する、という特徴がある^{〔2〕}。当『伽婢子』もこれらに当てはまるであろう。

この『伽婢子』が刊行された寛文十一年の鱗形屋の出版としては、柏崎氏の調査によると^{〔同注1〕}、『私可多咄』（国立国会図書館）、『日蓮上人註画讃』（東京大学総合図書館）、『堪忍記』（広島大学中央図書館）、『しくれの宴』（国立国会図書館）などがある。このうち『私可多咄』の挿絵は菱川師宣の代表的なものとされてきたが、近年、佐藤悟氏に

より否定的見解が提出されている³⁾。とするなら、師宣でない、いわゆる寛文巨匠と呼ばれる絵師によったものかとも推測される。ただ、

師宣が「絵師 菱川吉兵衛」として署名を行ったのも寛文十二年からであり（『武家百人一首』鶴屋刊）、当本とはほぼ同時期であることは、その背景として視野に入れておく必要がある。師宣絵本は、その後しばらく間を置いて、延宝年間において花開くこととなる。

ちなみに、鱗形屋の早期の出版に関するわずかの例をあげると、仮名草子関係では、『ちんてき問答』（京大顕原、早大、うろこかたや孫兵衛）、『糺物語』（延宝五年、京大顕原）、『竹斎』（リチャード・レイン）、『ひそめ草』（京大国文）、『千世能』（静嘉堂）などがあり、他に『鸚鵡新徒然草』（筑波）、『源氏あかし物語』（慶応）、『小町物かたり』（東大霞亭他）や、本地物の『弘法大師之御本地』（東大霞亭）などがある。また、鱗形屋は軍記物も手がけており、『鎌倉九代記』（延宝六年、岡山大池田）、『義氏軍記』（リチャード・レイン）、『三浦軍記』（天理）、『北条五代記』（元禄十年、国会）などを刊行した。その他、『好色一代男』の江戸板の絵本化（『大和絵の根元』『好色世話絵づくし』、貞享三年、菱川師宣画）をはじめ、草双紙、芝居本、評判記、細見など多岐にわたる書物を刊行し、八文字屋本などにも関与したが。本稿ではこれ以上触れないでおく⁴⁾。また、初期の刊行物に関する作品は塩村耕氏一覧なども参照されたい⁵⁾。

以上、鱗形屋はジャンルを超えて様々な分野の書物を刊行したのであり、その出版活動の全容解明は今後の大きな課題である。そして、菱川師宣、あるいは師宣工房を擁しての出版活動は文学・美術双方に及ぶ大きな影響を与えたのであり、その方面の考察もさらに検討を要

しよう。

注

- (1) 柏崎順子氏「鱗形屋」（『言語文化』第四十七巻、二〇一〇年二月、一橋大学語学研究室）
- (2) 同「江戸版考 其三」（『人文・自然研究』第四号、二〇一〇年三月、一橋大学大学教育研究開発センター）
- (3) 佐藤悟氏「『私可多咄』の画工は菱川師宣に非ず」（『実践女子大学文学部紀要』第三〇集、一九八八年）
- (4) 長谷川強氏「浮世草子考証年表——宝永以降」（『青雲堂』一九八四年）につくと、鱗形屋は元文以後の八文字屋の江戸での売捌所ともなり、板元にも名を連ねた（『風流東海硯』の項参照）。鱗形屋は山野氏であり、孫兵衛は山野孫兵衛とも称している（『明和二年刊『禁短気次編』』。また、黒本では、『丹波爺打栗』に十一部の新版書目などが掲載されている（木村八重子氏『草双紙の世界』20「黒本の表紙が語るもの」に写真掲載、ベリかん社、二〇〇九年）。
- (5) 「元禄末年以前の江戸版元と出版物一覧」（『近世前期文学研究——伝記・書誌・出版——』若草書房、二〇〇四年）

〈謝辞〉

本稿は松原孝俊・中野三敏氏を代表とするホノルル美術館調査に基づくものである。調査ならびに紹介論文、図版掲載などを許可されたホノルル美術館のご厚意に感謝申し上げる。なかんづく、実務において種々ご配慮をいただいた館員諸氏の方々に対して、心から深甚の謝意を申し上げる。

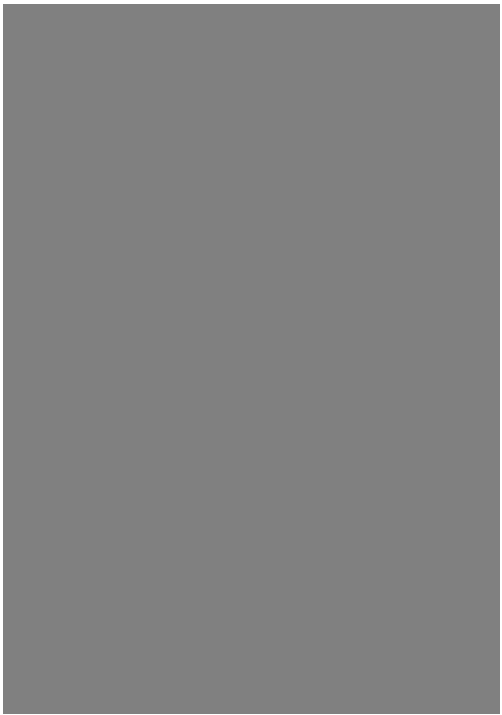
〈図版〉

当図版はホノルル美術館のご厚意により掲載する。挿絵情報は以下の通りである。



表紙（巻一）

- | | | | | | |
|---|-------------|-----------|---|---------|---------------------|
| 1 | （タイトル） | 御伽婢子 | 2 | （著者） | 浅井了意 |
| 3 | （出版年） | 1671年 | 4 | （様式／形態） | 版本 |
| 5 | （寄贈者／購入先／年） | 2003年 | | | リチャード・レインコレクションより購入 |
| 6 | （美術館番号） | 2010・0462 | 7 | （写真家名） | スコット・クボ |
| 8 | （著作権所有者） | ホノルル美術館蔵 | | | |



本文冒頭（巻一）



序文冒頭（巻一）

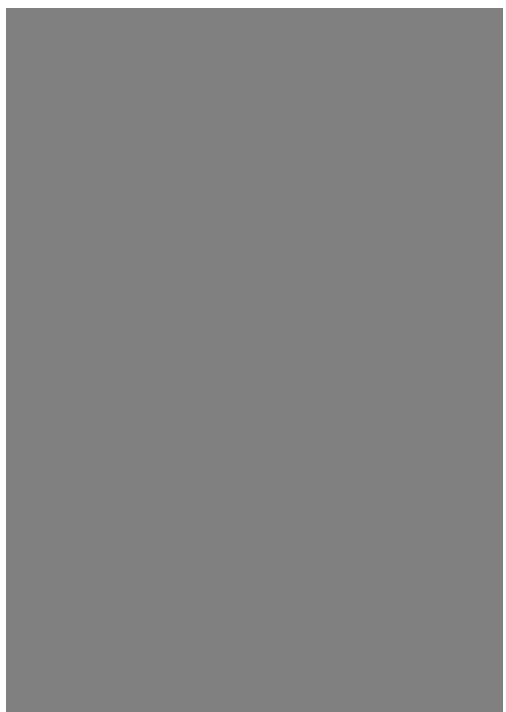
著作権保護のため図は非表示



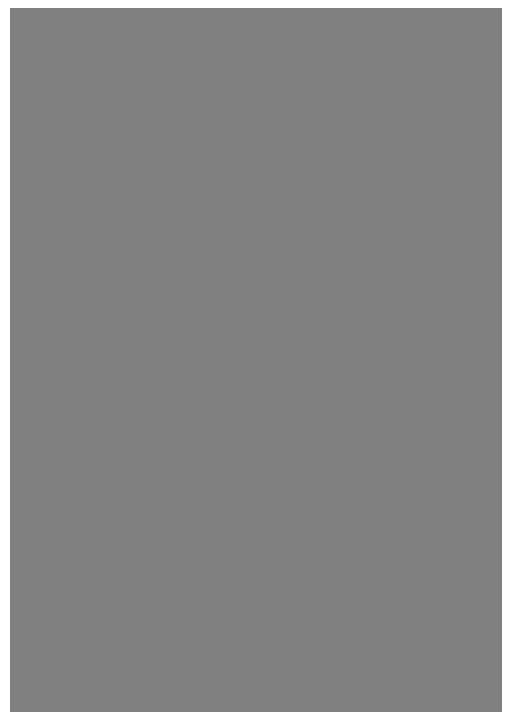
挿絵 第二図（巻一）



挿絵 第一図（巻一）

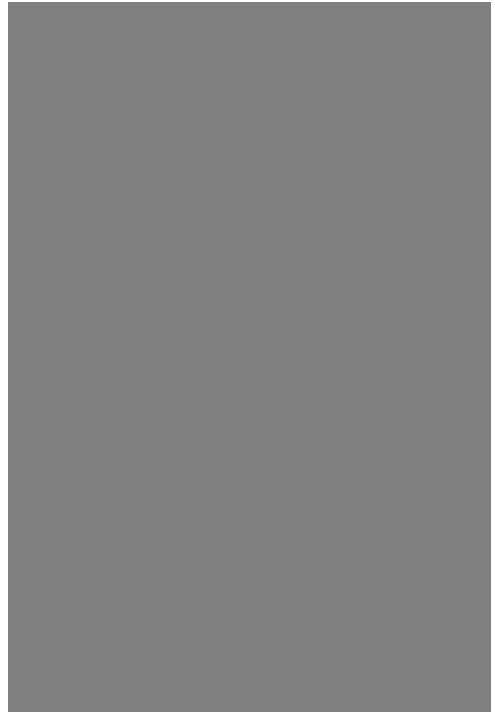


挿絵 第四図（巻一）



挿絵 第三図（巻一）

著作権保護のため図は非表示



刊記（巻末）